数式処理 *J.JSSAC (1998)*
Vol. 6, No. 3, pp. 1 - 1

編集委員会から

６巻３号と数式処理の査読体制

数式処理学会誌６巻３号をおおくりします。本号の当初の計画は、主に数式処理の応用に関する解説記事を中心にする予定にしておりましたが、多くの事情から掲載を急ぐ必要のある論文２編で構成することにしました。

学会誌では投稿論文への査読制度の確立をはかってきました。数式処理学会のようにまだ弱小で、投稿論文も集まりにくい学会の学会誌に厳密な査読制度を置くことに異論を唱える方もおられるでしょう。しかし、掲載論文の質が一流と称せられる大きな学会のものと比較しても決して劣らないことと、査読の丁寧さは誇っていいと思います。査読をされる方の熱意に頭が下がります。若手研究者が気楽に着想を発表していく場としての学会誌の活用は重要ですので、着想を重要視した査読も行いレター等での掲載を心がけています。査読者には本学会構成員以外でも、各研究分野で活発にご活躍中の研究者の方々に広く依頼状をお送りしています。今後も、このような体制を続けたいと思います。

さて、本号に掲載の２論文の中、趙、櫻井、杉浦、鳥居各氏のものは、査読結果をまとめるのに非常に時間がかかってしまい、著者にご迷惑をおかけしたものです。内容が多岐に渡り、数式処理、ユーザインターフェース、自然言語処理等の各分野の専門家だけでは対応しきれず、査読者の選定・依頼あるいは査読結果のとりまとめに時間を費したものです。論文で扱われる数学記号や数式の評価手法の研究は、国際的にも数式処理の分野で重要視されており、まさに数式処理が境界分野の学問を含んでいることを物語るのに好都合な例になっています。次に、尾崎、佐々木両氏の論文があります。こちらは逆に、査読が円滑に遂行された例です。今でこそ数値計算と数式処理を兼ね備えた論文は、数式処理関係の論文として異端でも学際研究でもなくなっていますが、つい数年前まではこの種の論文も２つの計算方法の間の境界分野の研究といわれていたものです。なお、両論文ともに査読者としては本学会員の方はもちろん、学会員でない方々にもご多忙中をいくどとなくご協力いただき貴重な査読報告を送っていただきました。この点も感謝しておきます。

© 1998 Japan Society for Symbolic and Algebraic Computation